

温泉街型観光地の屋外公共空間の魅力に関する 試行的な調査および分析

笠間 聡¹・松田 泰明²

¹正会員 国立研究開発法人土木研究所 寒地土木研究所 (〒062-8602 札幌市豊平区平岸1条3丁目1-34)
E-mail: kasama@ceri.go.jp

²正会員 国立研究開発法人土木研究所 寒地土木研究所 (〒062-8602 札幌市豊平区平岸1条3丁目1-34)
E-mail: y-matsuda@ceri.go.jp

観光振興や、観光地としての魅力向上、特に近年課題となっている滞在型観光の促進や観光地における滞在時間の向上を考える上で、景観や空間の質や機能は重要である。しかしこの点で、日本の観光地は海外の観光地に大きく見劣りしているのみならず、実行されている改善の取組みの面でも効果的なものとなっていない事例が多くみられる。

そこで筆者らは、魅力的な観光地の条件を屋外公共空間の面から明らかにすることで、屋外公共空間の効果的な改善と、観光地の魅力向上に貢献していくことを考え、これに関する研究に取り組みはじめたところである。本発表では、この目的のため行なった、国内のいくつかの温泉街型観光地とその屋外公共空間の現状に関する試行的な調査の結果と、これに基づく分析や考察の結果について報告を行う。

Key Words : *Public Spaces, Tourist Destinations, Attractiveness, Element*

1. はじめに

(1) 研究の背景と目的

近年「観光立国」や「地方創生」のキーワードの下、観光関連の施策や取組みに注目が集まっている。

実績の面でも、2015年には訪日外国人旅行者数が年間2000万人目前にまで迫り、にわかに活気づいている感があるが、真面目に受取るべきはこの数字ではなく、世界文化遺産富士山に対するICOMOSの勧告¹⁾やアレックス・カーの著作での指摘³⁾に代表される、日本の観光地の空間的な質の低さに対する警鐘であると考えられる。

観光庁からも「日本版DMO」が打ち出され⁴⁾、観光地の魅力のマネジメントの必要性が指摘されている⁵⁾。海外観光客急増の恩恵を受けている今こそ、観光地の魅力の底上げは急務であると考えられる。

一方、観光地の魅力を考える上で、空間の質が重要であることは、改めて指摘するほどのことではないが、例えば、観光地の魅力を構成する要素について研究を行い「空間快適性」のウェイトが相対的に高いことを明らかにした運輸政策研究所の研究結果⁶⁾などがある。

しかし、それらの「空間快適性」、すなわち観光地の空間的な質や魅力を効果的に高めるための具体的方策については、十分に研究が行われていない。

そこで筆者らは、観光地のパブリックな空間に焦点をあて、その魅力向上の手法と、観光地全体の魅力アップへの貢献方法について研究と検討を始めたところである。

本研究は、観光地の屋外公共空間を対象に、観光地の魅力に寄与する要素や要因を明らかにし、観光地の効果的な魅力向上方法について知見を得ることを目的としている。

(2) 本研究における言葉の定義

本研究で用いる言葉の定義については以下の通りとする。

a) 観光地

観光地、観光スポット、観光圏などの言葉が示すように、観光地の単位は小さなものから大きなものまで様々ある。エリア内を徒歩で回る観光もあれば、自動車や公共交通機関を利用して点在する観光スポットを回る観光もあるほか、ドライブや遊覧船など乗り物に乗ったままの観光もある。研究を行う上では、研究の対象とする観光地の概念を絞り込む必要がある。

ただし、観光地として考える単位が大きくなればなるほど、そこには多様な要素が入り込むこととなり、分析にあたってのノイズが増えていく。一方で、公共の空間を研究の対象とする立場からは、単独の観光スポットだ

けを研究の対象とすることは不適當である。

このようなことを考慮し、本研究では、徒歩で回る規模を観光地の単位として考えることとし、おおよそ直径1km程度のまとまりで考えることとした。また、そのような観光地の単位が連担したり、互いに影響を及ぼし合うとやはり分析の上でのノイズとなるので、比較的独立性の高い観光地を研究の対象とすることとした。したがってパリや神戸、横浜のような都市型の観光地は当面の研究の対象とせず、山あいの温泉街や集落のような観光地を当面の研究の対象とする。

b) 屋外公共空間

本研究で言う「屋外公共空間」とは、観光地の空間のうち、その土地の所有者に関わらず、パブリック、すなわちその土地を訪れる観光客が一般的に利用することができる空間及びそこから見通せる範囲を指すこととする。

したがって、公共の所有する道路や公園、広場はこれに含む一方、公共の所有でも一般にアクセスすることができない立入制限区域等は含まない。また、企業や個人の所有する土地であっても、自由に立ち入ることのできる敷地の部分はこれに含み、建物の壁面や屋根の意匠、柵や窓の向こう側などパブリックな空間から見通せる範囲も含むものとする。

(3) 本研究の概要

前節に示した研究の背景と目的のもと、本研究では以下の調査と分析を実施した。

全国で評価の高い徒歩圏規模の温泉街から6つを選び、屋外公共空間の現状や観光客の利用状況等について現地調査を行い、また、過去と現在の観光地づくりに関する取組み内容と集客や評判の変化について把握するための資料収集とヒアリング調査を行った。

なお、温泉街型の観光地を調査の対象としたのは、類似の形態の観光地が全国に多く分布していることと、観光行動上「物見」よりも「滞在」に重点がおかれており、

物見の対象（例えば文化財や歴史的資源など）の有無や良し悪しに観光地の評価が影響を受けにくいことによる。

その上で、調査対象とした観光地の屋外公共空間についてその共通点の整理を行い、魅力的な観光地の要件（「パターン」⁷⁾）の候補として整理を行った。

最後に、それらの魅力的な観光地の「パターン」について、全国のいくつかの観光地での適合状況を確認し、それらの妥当性の考察や、ケーススタディの対象とした観光地の現状評価を行った。

2. 温泉街型観光地の現地調査

前述のとおり、国内の6の温泉街型観光地を対象とした現地調査およびヒアリング調査を行い、屋外公共空間の現状や観光客の観光行動の特徴について把握を行った。

本調査で調査対象とした温泉街型観光地は、表-1の6観光地であり、全国から近年評価の高い温泉街を選定した。なお、これらの選定にあたっては、ミシュラン・グリーンガイド⁸⁾や、じゃらんの人気温泉地ランキング⁹⁾、女子旅向けの観光ガイド誌「ことりっふ」¹⁰⁾の刊行範囲などを参考としている。

調査は、2015年の11月中旬～2015年の12月上旬にかけて実施した。調査準備に時間を費やし夏のシーズンを逃してしまったため、秋の紅葉シーズンを狙って調査を実施したものであるが、紅葉の訪れが予想より早かったこともあり、紅葉の終わりかけ時期の調査となってしまったことを補足しておく。

(1) 調査の視点

調査では、まず、観光ガイドやヒアリング等に基づいて観光客の代表的な観光行動のモデル化を行い、それをもとに主要な徒歩観光ルート抽出を行った。そして、その徒歩観光ルートに沿って現地調査を行い、屋外公共

表-1 調査の対象とした温泉街型観光地の一覧

名称	所在地	人気温泉地 ランキング ※	ミシュラン グリーンガイド 2012 ※※	ことりっふ(株式会社 昭文社) 刊行状況
A. 黒川温泉	熊本県阿蘇郡南小国町	1	★★	○ (由布院・黒川温泉)
B. 由布院温泉	大分県由布市	3	★★	○ (由布院・黒川温泉)
C. 有馬温泉	兵庫県神戸市	13	○	△ (神戸)
D. 城崎温泉	兵庫県豊岡市	6	-	○ (城崎温泉・出石・豊岡)
E. 加賀山中温泉	石川県加賀市	15	-	△ (金沢)
F. 野沢温泉	長野県下高井郡野沢温泉村	-	★★	△ (小布施・長野・戸隠・湯田中渋温泉)

※ じゃらん人気温泉地ランキング2015 (株式会社リクルートライフスタイル) を元に、筆者らにて独自に「もう一度行ってみたい」の回答数を、「最近1年間に行ったことがある」の回答数で除したランキングを作成して表示。

※※ 2つ星(★★)の温泉街は全国で9カ所、1つ星(★)は7カ所、星なし(○)は7カ所、計23カ所。

空間の現状や観光客の観光行動について把握を行った。

次節以降に、各温泉街の概要や、設定したモデル的な徒歩観光ルートとその位置などを整理するが、おおむねをご存知の方は読み飛ばしも可である。

(2) 黒川温泉の概要整理

阿蘇の山間の田の原川沿いに、30軒ほどの比較的小規模な温泉旅館が寄り添う、山間のひなびた雰囲気の人気温泉街である(写真-1)。

土産物屋や茶屋が並ぶ川端通りと、1本上のさくら通り(旧小国街道)がメインの通りであり、全体の規模は決して大きくはない。

いる(写真-5)。ゆげ街道は2003年完成にて拡幅整備されて再生された通りで、その際に街並みの景観整備が行われている。これに並行するのが大聖寺川と鶴仙溪で、鶴仙溪の散策も古くから人気がある。



写真-1 黒川温泉

(3) 由布院温泉の概要整理

大分県由布市、由布院盆地の豊かな田園の中に立地する温泉街である(写真-2)。由布院温泉の名前を冠する温泉宿自体は、由布院駅を中心とする半径2km程度の範囲に広がっているが、今回の調査では、由布院駅から金鱗湖までの市街地部分を温泉街として扱う。

由布院駅から由布岳に向かって伸びる由布見通りと、そこから分岐する湯の坪街道が温泉街の骨格で、宿泊施設や店舗の集積は金鱗湖までのエリアに広がる。



写真-2 由布院温泉

(4) 有馬温泉の概要整理

兵庫県神戸市の山間、六甲山の裏側に位置し、関西の奥座敷とも呼ばれる古くからの温泉街である(写真-3)。山間の狭い土地に立地することもあり、温泉街は半径500m程度の範囲にすっぽりと収まる規模である。

温泉街の骨格は「湯本坂」であり、歴史的な雰囲気温泉情緒にあふれた街並みが形成されているが、これらは温泉街の有志の先導により近年になって整備されたものである。



写真-3 有馬温泉

(5) 城崎温泉の概要整理

兵庫県豊岡市に立地する温泉街(写真-4)。温泉街は、城崎温泉駅から北西方向に大谿川のつくる谷間に沿っておよそ1kmほどの広がりをもつ。

現在の大谿川沿いの石垣、石橋、柳並木、3階建ての木造旅館といった街並みは、1925年北但馬地震の復興により整備されたものとされる。各旅館で内湯を作らないことを旧来からの取り決めとしており、7カ所整備された外湯をめぐるのが城崎の楽しみ方となっている。



写真-4 城崎温泉

(6) 加賀山中温泉の概要整理

石川県加賀市に位置する温泉街で、同じ加賀市の片山津温泉などとあわせて加賀温泉郷と総称される。

共同浴場「菊の湯」がまちの中心であり、ここから南西に伸びる「ゆげ街道」が現在の温泉街の骨格となつて



写真-5 加賀山中温泉



写真-6 野沢温泉

(7) 野沢温泉の概要整理

長野県野沢温泉村に位置する温泉街で、共同浴場「大湯」のあたりを中心に、半径300mほどの範囲に多くの温泉宿や飲食店が密集している（写真-6）。

観光客にも開放された13カ所の共同浴場（外湯）が特徴で、近年は冬場のスキー時期には欧米からのスキー客で大変な賑わいをみせる。

3. 各観光地の共通点（パターン）

以上に概要を紹介した調査対象の6観光地は、前述のとおり、全国的にも少なからずの評価を得ている観光地である。したがって、これらの観光地の共通点を探し出すことで、魅力的な滞在型観光地に求められる要件について示唆を得ることができると考えられる。

2章の調査から得た共通点の仮説は以下のとおりである。以下にこれらの各項目について、今回調査を行った6事例をもとに詳述する。

(1) 屋外での時間の過ごし方の提供

観光客にとって限りある旅行期間の中で、理由もなく屋外に滞在したり、散歩したりすることは難しく、したがって観光客に滞在や散策を促すには、屋外に繰り出す理由を提供することが必要と考えられる。

このようなものとして、A.黒川温泉では1986年から「入湯手形」の取組みが行われている。D.城崎温泉でも外湯めぐりを促す取組みが旧来から行われており、F.野沢温泉でも13ある無料の外湯（共同浴場）が観光客にとって外に繰り出す理由となっている。

E.加賀山中温泉で近年はじまった鶴仙溪の川床も、鶴仙溪を訪れる意欲を高める効果をもたらしていると考えられる。B.由布院やC.有馬では特段の取組みは行われていないが、それぞれ湯の坪街道や湯本坂の店舗の集積が観光客を誘う要素となっている。

これらをまとめたのが表-2である。

表-2 各観光地における「屋外での過ごし方の提供」の現状

名称	屋外での時間の過ごし方の提供
A. 黒川温泉	◎ 湯めぐり手形システム
B. 由布院温泉	△ - 湯の坪街道の店舗の集積
C. 有馬温泉	△ - 湯本坂・太閤通りの店舗の集積
D. 城崎温泉	◎ 外湯めぐりシステム
E. 加賀山中温泉	○ 鶴仙溪の川床・遊歩道
F. 野沢温泉	◎ 外湯(13カ所の共同浴場)

(2) 観光地のアイデンティティとなるような象徴景

ピクチャレスクな、その観光地に特有の象徴的な風景は、観光地のアイデンティティを強め、観光客にいつか訪れたいという想いを与え、また現地でその風景を目にすることで当該観光地を訪れたという達成感を強めるといった効果があると考えられる。

今回調査した6観光地では、表-3および写真-7に示すような各観光地を代表する象徴景が確認でき、各種の情報媒体等に利用されていることを確認できる。

ただし、B.由布院の大分川と由布岳の風景（写真-1(c)）やE.加賀山中温泉の鶴仙溪（写真-1(g)）では、街並み等が風景の中に含まれておらず、温泉街への滞在のイメージがつかみにくいように思われる。

また、B.由布院の湯の坪街道の風景は、観光協会などの公式のウェブページ等では採用がみられない。

(3) 豊かな自然と一体化した街並み

今回調査した多くの観光地では、観光地の周囲には山や農村などの豊かな自然環境があり、観光地の中核からもそれらを見通すことができたり気配を感じたりすることができるようになっている。さらに、観光地の内部には、それらの自然環境とつながりのある要素（植栽や河川など）がちりばめられ、街並みと周辺の自然環境の一体感が演出されている。

表-4にまとめたように、A.黒川温泉の街路やB.由布院の湯の坪街道には、沿道の民地の至る所に雑木の植栽があり、周囲の里山の環境が温泉街に取り込まれている。

C.有馬温泉やD.城崎温泉、E.加賀山中温泉でも、街並みの背後にはすぐ里山が迫り、それぞれ六甲川沿いや大谿川沿い、ゆげ街道などの開けた空間からはこれらを見通すことができる。あわせて、D.城崎温泉・大谿川沿いの柳並木やE.加賀山中温泉・ゆげ街道の雑木風の街路樹、

表-3 各観光地における「観光地のアイデンティティとなるような象徴景」の現状

名称	アイデンティティとなるような象徴景	
	・ 象徴景の構成	・ 掲載例
A. 黒川温泉	○ 丸鈴橋からの田の原川と旅館(ふじ屋)	観光ガイド誌, Wikipedia
B. 由布院温泉	△ 湯の坪街道	※ 公的ウェブサイトやガイドでは、由布院の代表景としての紹介は少ない
	大分川と由布岳 ※街並みは含まれない	由布院温泉観光協会
C. 有馬温泉	○ 太閤橋からの六甲川とねね橋・旅館群・六甲の山々	Wikipedia
	金の湯と湯本坂	Wikipedia
D. 城崎温泉	○ 大谿川沿いの石橋、柳並木、木造旅館の風景	城崎温泉観光協会, Wikipedia
E. 加賀山中温泉	△ 鶴仙溪（川床） ※街並みは含まれない	山中温泉観光協会web, 観光ガイド誌
F. 野沢温泉	○ 共同浴場「大湯」	野沢温泉観光協会web, 観光ガイド誌
	「麻釜」	観光ガイド誌

C.有馬温泉の要所に植えられた季節感のある樹木などが、これらの里山の雰囲気や街中に引き込む装置として機能している。

F.野沢温泉は同じく山に囲まれた環境ではあるが、建物の密度が高いこともあり、街中からこれらを見通せるところは限られ、足湯広場「湯り」などの高台に登らないと十分に感じる事ができない。

(4) 景観に優れた適度な長さの散策路

散策や回遊を促す取組みが、まちづくりや観光地づくりの取組みでは盛んであるが、観光客にとって、せっかく散策するのであれば日常とは異なる独自の世界観のある空間であることが望まれると考えられる。このためには、その世界観に没頭するため散策路にはそれなりの延長が必要となるし、世界観を演出するだけの景観的な統制が必要となる。

このような散策路について、各温泉街での存在の有無を取りまとめたのが表-5である。

A.黒川温泉では温泉街全体で、雑木に囲まれた山里の風景が演出されており、温泉街のメインストリートにあたる川端通りと旧小国街道（さくら通り）を通過して丸鈴

橋を起終点として約600m。立ち寄りを除いても15分程度の散策が楽しめる。

B.由布院温泉では、湯の坪街道（約700m）が散策路の骨格となっている。一時期は過度な商業主義による景観的な混乱もあったとのことだが、近年は景観計画や景観



(a) 黒川 丸鈴橋の風景



(b) 由布院 / 湯の坪街道



(c) 由布院 / 大分川と由布岳



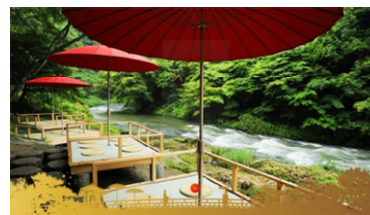
(d) 有馬 / 太閤橋から



(e) 有馬 / 金の湯



(f) 城崎 大谿川と柳並木



(g) 加賀山中 鶴仙溪



(h) 野沢 / 大湯



(i) 野沢 / 麻釜(おがま)

表-4 各観光地における「豊かな自然と一体化した街並み」の現状

名称	自然景観の取り込み	
	・近景	・遠景
A. 黒川温泉	○ 民地の雑木	周囲の里山との一体感
B. 由布院温泉	○ 民地の雑木	由布岳への見通し
C. 有馬温泉	○ 要所の庭木	六甲の山々への見通し
D. 城崎温泉	○ 大谿川の柳並木	周囲の山並みへの見通し
E. 加賀山中温泉	○ ゆげ街道の雑木風街路樹	周囲の山並みへの見通し
F. 野沢温泉	×	沿道に建物がかぶり張り付き、沿道の植栽や、周囲の山々との一体感に乏しい。

表-5 各観光地における「景観に優れた適度な長さの散策路」の現状

名称	景観に優れた適度な長さの散策路	
	・散策路名称	・散策路延長
A. 黒川温泉	○ 川端通り～旧小国街道(さくら通り)～丸鈴橋	約600m / ループ
B. 由布院温泉	○ 湯の坪街道	約700m / 片道
C. 有馬温泉	○ 六甲川沿い(太閤橋～ねね橋)～太閤通り～湯本坂	約1km / ループ
D. 城崎温泉	○ 城崎温泉駅～地蔵湯 ○ 大谿川沿い(地蔵湯～一の湯) ○ 一の湯～御所の湯～鴻の湯・温泉寺	約300m / 片道 約300m / 片道 約600m / 片道
E. 加賀山中温泉	○ 鶴仙溪(あやとり橋～こおろぎ橋) ○ ゆげ街道(こおろぎ橋～菊の湯)	約800m / 片道 約700m / 片道
F. 野沢温泉	×	景観に特に優れた散策路は存在しない

写真出典

- (a) Wikipedia
- (b) TripAdvisor
- (c) 由布院温泉観光協会
- (d) 神戸刊行壁紙写真(webサイト)
- (e) Wikipedia
- (f) 城崎温泉 若旦那の会
- (g) 山中温泉観光協会
- (h) find-travel.jp
- (i) find-travel.jp

写真-1 各観光地における「観光地のアイデンティティとなるような象徴景」の例

協定を通じて景観への配慮が行き届き、落ち着いたたたずまいが演出されている。ただし由布院駅から金鱗湖まで歩いて往復すると3kmを超える距離になってしまい、観光客の一部には徒歩で歩くのにやや過大である。

C.有馬温泉では、湯本坂の界隈に温泉街の情緒を感じさせる店舗や旅館、寺院などの集積があり、一周で約1kmの散策を楽しめる。

D.城崎温泉では、大谿川の水面と石垣と石橋、川沿いの柳並木、木造旅館の街並み、街並みのすぐ背後に迫る里山の風景が、湯冷ましのそぞろ歩きにぴったりの風景を作っている。地蔵湯～一の湯までの核心的な区間は300mほどと物足りない距離であるが、草履履きで歩調がゆっくりになるのに加え、周辺の界隈も街並み景観的には調和が図られており、外湯もより広範なエリアに点在しているので界隈全体では一度には歩ききれないほどのボリュームとなっている。

E.加賀山中温泉では、鶴仙溪とゆげ街道のダブルルートとなっており、鶴仙溪をあやとり橋からこおろぎ橋までで800m。ゆげ街道を歩いて山中座・菊の湯まで戻ってきて700mほど、計1.5kmとほどよい距離である。鶴仙溪では遊歩道や川床などの整備が行き届いた自然散策が楽しめる。ゆげ街道では街路の拡幅整備にあわせて街並み整備が行われているため、統一された街並み景観の中、土産物屋めぐりを楽しめる。

F.野沢温泉では、外湯と呼ばれる共同浴場を巡るルートが散策ルートといえるが、野沢のシンボルでもある「大湯」を中心に網の目状に温泉街が広がっており、骨格が明確でない。建物の規模と色彩が揃っていないために全体の街並みに調和が感じられるものの、景観的に特に優れているというほどではない。

(5) 散策や滞留の拠点となる広場等

歩く、店や観光施設を訪ねる、以外の時間の過ごし方を提供するものが、大小の広場や展望・休憩スペースである。これらの広場等がまちの中核や風景上のハイライトにあると、休憩や写真撮影、これまでの風景体験のおさらいや、今後の観光行動の検討などに利用することがで

き、観光がより充実したものになると考えられる(表-6)。

A.黒川温泉では、温泉街のほぼ中央に位置する、田の原川にかかる丸鈴橋とそれに隣接する緑地がこのような拠点となっており、しばしたたずみ、写真を撮影したり地図を広げたりする人が確認できる。

B.由布院温泉では、金鱗湖と由布院駅前が唯一ゆっくり滞留できる場所であるが、いずれもまち外れの位置にあり、散策の起終点ではあるものの拠点的な位置づけは若干弱い。散策のメインである湯の坪街道からも離れている。

C.有馬温泉では、六甲橋にかかるねね橋や金の湯の足湯広場がこのような拠点となっている。

D.城崎温泉では、城崎のシンボルである大谿川と外湯が結びついた地蔵湯前の地蔵湯橋が拠点となる。また、城崎温泉の駅前にはさとの湯の足湯広場があり、鉄道の時間待ちなどに、疲れを癒やしたり余韻に浸ったりができる空間を提供している。

E.加賀山中温泉では、菊の湯・山中座前の広場がその位置を占める。

F.野沢温泉では、野沢のシンボルでもある麻釜とその周辺に整備された足湯広場が温泉街を一望できる高台にあるが、まち外れの位置にあり、拠点的な位置づけは弱い。

表-6 各観光地における「散策や滞留の拠点となる広場等」の現状

名称	散策や滞留の拠点となる広場
A. 黒川温泉	○ 丸鈴橋(川端通り)・隣接の緑地
B. 由布院温泉	△ 金鱗湖 ※散策ルートの終点
C. 有馬温泉	○ ねね橋
D. 城崎温泉	○ さとの湯足湯広場(駅前) 地蔵湯前広場・地蔵湯橋 ロープウェイ前足湯広場 ※散策ルートの終点
E. 加賀山中温泉	○ 菊の湯前広場
F. 野沢温泉	△ 足湯広場「湯らり」※散策ルートの終点

表-7 各観光地における「歩行者優先の街路空間」の現状

名称	歩行者優先の街路空間		
	・街路空間名称	・幅員構成	・自動車交通
A. 黒川温泉	○ 川端通り 旧小国街道(さくら通り)	幅員3m程度 幅員6m程度	通り抜けも難しい幅員でごく少ない。 それなりにある(沿道に公共駐車場)
B. 由布院温泉	○ 湯の坪街道	幅員4m程度	それなりにある。
C. 有馬温泉	○ 湯本坂	幅員3m程度、一方通行	通り抜けも難しい幅員でごく少ない。
D. 城崎温泉	○ 大谿川沿い	幅員6m程度	それなりにある。
E. 加賀山中温泉	○ ゆげ街道	歩車分離、植栽帯 歩道3m+車道6m+歩道3m	並行する国道がバイパスとして機能し、 都市間の通過交通は排除されている。
F. 野沢温泉	○	幅員4m程度	幅員4m程度

(6) 歩行者優先の街路空間

歩いて観光する観光客にとって、自動車は危険と騒音を提供する邪魔者でしかない。自動車を意識せずに歩ける空間がまちの中核にあることは、観光を阻害されることを避ける意味でも大変重要である(表-7)。

A.黒川温泉のメインルートである川端通りと、C.有馬温泉の湯本坂は、幅員が3m前後と極端に狭く、結果として車の進入しにくい環境をつくり歩行者優先の街路空間となっている。

D.城崎温泉の大谿川沿いやF.野沢温泉の街中も、車がすれ違うのに十分な幅員がないため、結果として車の走行速度が抑えられ歩行者は車を必要なときだけ避ければよい環境が作り出されている。

E.加賀山中温泉のゆげ街道は歩車が明確に分離され、植栽帯もあって、車を気にせず歩ける環境が確保されている。

B.由布院の湯の坪街道は、歩行者であふれ返っており、みんなで歩けば怖くないの様相を示しているが、車通りもそれなりにあり、混乱がみられる。

該当し得ると考えられるが、風景に変化が乏しく、遊覧船やボート乗り場以外の立ち寄り地も特にないため、延々と歩くのは苦痛も伴う。また、温泉街のメインストリートとの連続性にも乏しい。

このことから、景觀に優れる、適度な長さ以外にも「変化のあること」が要件として求められている可能性がある。あるいは、湖畔という開放的な環境ゆえに、多くの要素が眺望の中に取り込まれ、結果としてそれらの組合せがどこかで以前に体験した風景と大差のないものと判断されている可能性もある。

e) 散策や滞留の拠点となる広場等

湖畔の親水公園全域があてはまるが、市街地とは離れている。

f) 歩行者優先の街路空間

温泉街のメインストリートは、10mほどの車道を持つ立派な街路で、歩道にも十分は幅員はあるものの車道で分断され「歩行者優先の街路空間」とはなっていない。

4. パターンの有効性に関する考察

3章で指摘した6つのパターンについて、他の観光地をモデルケースに用いてその適合の状況を確認し、6つのパターンの有効性について考察を行った。

結果を以下に詳述する。

(1) 洞爺湖温泉：北海道洞爺湖町

a) 屋外での時間の過ごし方

特に用意されていない。湖畔の遊歩道沿いに彫刻が点在して置かれているものの、これを目的に散策するほどのものでもない。湖畔の遊歩道に面して、屋外で食事や飲食をできる空間があれば、贅沢な時間を過ごせるものと考えられるがそのようにはなっていない。

b) 観光地のアイデンティティとなるような象徴景

湖畔の遊歩道から洞爺湖を眺める風景がひとつにはあるが、そこには温泉街の街並みなどは写り込んでおらず、その観光地で得られる滞在体験をイメージできるものとはなっていない(写真-9)。

c) 豊かな自然と一体化した街並み

温泉街のメインストリート(写真-10)からは、湖や周囲の山並みを見通すことができず、不十分である。街路に街路樹はあるものの、人工的な印象がぬぐえず、自然の気配を感じるものとはなっていない。

d) 景觀に優れた適度な長さの散策路

景觀に優れた散策路には湖畔の遊歩道(写真-11)が



写真-9 洞爺湖温泉の象徴景のひとつ：洞爺湖



写真-10 洞爺湖温泉街のメインストリート



写真-11 洞爺湖畔の遊歩道

(2) 小布施修景地区界隈：長野県小布施町

明らかになったパターンについて、温泉街以外の観光地にも適用を試行するという趣旨で、全国的にも評価が高い、徒歩圏規模の独立性の高い観光地として長野県小布施市の小布施修景地区界隈（図-1）に照合してみる。

結果は以下のとおりで、パターンには6/6の適合であった。

a) 屋外での時間の過ごし方

散策や滞留の時間を増やす積極的な取組みとして「おぶせオープンガーデン」が実施されている。また、修景地区内の美術館・記念館や土産物屋めぐりも人気である。

b) 観光地のアイデンティティとなるような象徴景

栗の小径の風景があり、小布施文化観光協会のウェブページ（写真-12）や観光ガイド等で広く使われている。

c) 豊かな自然と一体化した街並み

街並みに雑木や笹がさりげなく取り込まれ、長野盆地の豊かな農村の雰囲気が出されている。

d) 景観に優れた適度な長さの散策路

景観に優れた散策路には、栗の小径と北斎館を中心とした修景地区の界隈があり、栗の小径～修景地区の外周を1周で約500mとなる。

e) 散策や滞留の拠点となる広場等

北斎館と栗の小径が面する角に「笹の広場」があるほか、修景地区の各店舗の前面に設けられた小広場がこれらの役割を担っている（写真-13）。



写真-12 小布施の象徴景：栗の小径
（小布施文化観光協会webサイト）



写真-13 小布施 笹の広場（Google Map）

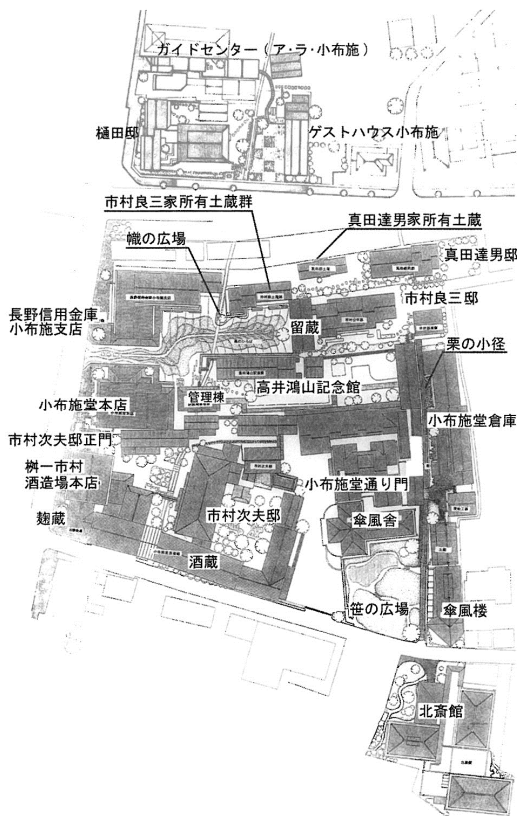


図-1 小布施修景地区周辺図（参考文献¹¹より引用）



写真-14 小布施 北斎館の前面道路

f) 歩行者優先の街路空間

北斎館前面の道路（写真-14）は、歩車の区分がなく、通過交通もないため、歩行者優先のゆったりとした雰囲気がある。栗の小径は歩行者専用であり、その他にも小さな路地のネットワークがそこかしこにある。

ただし、修景地区の西と北はそれぞれ国道と道道で、歩車は分離されているものの、交通量も多く、心から落ちついて散策できる環境とは言いがたい。

5. まとめ

本研究では、観光地の魅力向上に寄与する観光地の屋外公共空間のあり方について知見を得ることを目的とし、評価の高い国内のいくつかの温泉街型観光地の現状調査を行った。それらの観光地の共通点から、魅力的な滞在型観光地に求められる屋外公共空間の要件について、6つのパターン（仮説）を整理した。また、それらのパターンについて、他の観光地をモデルケースに用いてその適合の状況を確認し、6つのパターンの有効性について考察を行った。

本調査の範囲で明らかとなった魅力的な滞在型観光地に共通する6つのパターンとは、以下のとおりである。

「1. 屋外での時間の過ごし方の提供」「2. 観光地のアイデンティティとなるような象徴景」「3. 豊かな自然と一体化した街並み」「4. 景観に優れ変化のある適度な長さの散策路／固有の世界観に没頭できる適度な長さの散策路」「5. 散策や滞留の拠点となる広場等」「6. 歩行者優先の街路空間」の6つである。

今後はこれらのパターンの妥当性について、より多くの観光地との照合を通じて検証を行っていくとともに、パターンの拡充を検討していく予定である。また、今回明らかになったようなパターンに適合する屋外公共空間の具体的な形成方法についても、土木デザインや都市デザインの観点から検討を行っていききたい。

参考文献

- 1) ICOMOS : *Evaluations of Nominations of Cultural and Mixed Properties to the World Heritage List – ICOMOS Report for the World Heritage Committee*, pp.131-143, 2013
- 2) 日経電子版：世界遺産は期限付き？ 富士山に課された2年の宿題， 2014.2.13,
http://style.nikkei.com/article/DGXNASFK0400F_V00C14A2000000
- 3) アレックス・カー：ニッポン景観論，集英社，2014
- 4) 観光庁：日本版 DMO,
http://www.mlit.go.jp/kankocho/page04_000053.html
- 5) 観光庁観光地域振興部観光地域振興課：観光地域における空間形成プラン作成の手引き，2014
- 6) 室谷正裕：観光地の魅力度評価 -魅力ある国内観光地の整備に向けて-，運輸政策研究 Vol.1 No.1，1998,
<http://www.jterc.or.jp/kenkyusyo/product/tpsr/bn/no01.html>
- 7) C・アレグザンダー他著（平田翰那訳）：パターン・ランゲージ [環境設計の手引]，鹿島出版会，1984
- 8) Michelin Apa Publications Ltd : *The Green Guide JAPAN*, 2012
- 9) 株式会社リクルートライフスタイル：じゃらん人気温泉地ランキング 2015 投票結果報告，2014,
<http://jrc.jalan.net/j/surveys.html>
- 10) ことりっふ，旺文社
- 11) 川向正人：小布施 まちづくりの奇跡，新潮社，2010

(2016. 4. 22 受付)